

思想を欠いたことばは、なによりも死んだことばである。
…だがまた、ことばに体现されない思想には地獄の影が残されたままである。

レフ・ヴィゴツキー*

●本書の構成について

私たちは対話する存在です。人や環境と対話しながら人間は成長し、創造し、喜怒哀楽のなかで生きていきます。リハビリテーション治療において、それはなおさらのこと、真実になります。もっと言えば、この真実が軽視されればリハビリテーションは十分な成果を達成することができません。セラピストが臨床をやるうえで、この「対話」に対する理解は欠かすことができないのです。ですから本書は、人間に備わったこの「対話」によって成長し、創造し、生きていく力」を理解するためにつくられました。

この本の第1部の前半は、「対話」の意味やその潜在力について理解するための学術的な成果を提供するために書かれました。文中でも触れられていますが、人間が互いに対話によって成長し、支え合って社会を創り出し、そのなかで幸福を求めて生きていくというその原理を学術として発言することが反体制の烙印を押される命がけの行為だったソ連のスターリンによる粛清時代、そんな時代にヴィゴツキーによって生み出された思想が、こうして今日まで多くの人々によって発展させられてきました。本書を執筆した私たちは、このヴィゴツキーから始まる「対話」の理論が臨床を実践するセラピストの基礎知識として定着することを願っています。そのためにはききと、それについての丁寧な解説書があればいいのでしょうか。

でも私たちは、それだけではまだ十分ではないと思いました。本に書かれていることは、それを読むという作業がなければ人の心のなかには存在できません。ですから私たちは、まず自分たちが「対話」の学術的な意味を解釈するだけにとどまらず、それを読むことによって私たちの心のなかに生まれてくる意味を自分たち自身のことばに関わる経験をもとに語り合うという方法を選びました。書

かれていることの意味について語る声は、書かれたことばや論理を越えて、それがさし示すもの、まだことばにはなりきれないものの、そしてそもそもことばを越えているものの存在をも含めたより広大な人間の精神のことを私たちに教えてくれるのではないかと思ったのです。ことばの役割は、その意味することを伝えることであると同時に、それが意味するであろうものをさがしていく、そしてその道筋のなかでそれを語る声の持ち主が自分にとってのそれぞれの意味、自分にとってのそれぞれに新しいことばを発見していくことにあるのであろうと、私たちはそう思いました。対話の理論が私たちの経験の何につながっているのかを自分で確かめることから始めよう、まず自分たちが読み、そして対話するところまで進んでいくことが、学術を自分のこれからの経験の糧にするための方法であらう：つまりは、テキストに私たち自身それぞれの肉声を与えることができるのだらうと思っただけです。

ですから本書の構成は、まず冒頭に学術的なテキストを置き、それについて対話することでその意味を自分のなかに開いていくという形になっています。ヴィゴツキーに始まる対話の理論を出発点に、教育心理学、リハビリテーション治療、詩作というように、ことばを使ってことばを越えた人間の精神の仕組みへと日々の仕事のなかで向き合おうと努めている私たち自身の経験が語られています。

そしてこの一連の対話の結びとして、今度はこの本を読んでくれているあなたへの語りかけを置きました。本の形としては、残念ながらこれが物理的な限界です。でも、これが私たちとあなたとの対話の始まりになることを心から願っています。

「対話」の意味を確かめる

この第1部の前半を占めるテキストでは、まず人間の活動というものを、「対話」とそれによって生まれる相互的な関わりとして論じたヴィゴツキー、そしてバフチンの研究を手がかりに考えてみます。この「対話」という人間にとっても根源的なテーマは、リハビリテーションの臨床で常に必ず生まれる患者とセラピストとの関わりのあるかたに密接するものです。このテキストの要点を先に述べておきますと、ヴィゴツキーは発達と学習の問題を協同的な関係として論じています。彼の「発達の最近接領域論」はまさに協同的な学びを具体的に論じたものですが、彼がここで何を言いたかったのか、その意味するものを改めて考えてみます。バフチンは言語の本当の姿は日常の話しことばと対話活動にあるとして、具体的な人間のことばを使った世界で起きていることを明らかにしようとしてきました。バフチンの研究からリハビリテーションにおける対話を考えるためのヒントを探っていくことが狙いです。

身体・運動的活動の回復をめざすリハビリテーションでは、身体図式や身体イメージは重要な視点です。そのことに深く関わるものにメルロ・ポンティが身体の問題を現象学の立場から論じた考察があります。彼の仕事からは、身体が人間の活動と認識の中心にあることを改めて確認できます。さらにまた、ルリヤはヴィゴツキーと共同研究などを行った心理学者ですが、同時に彼は神経心理学、リハビリテーションの研究者として活躍した人でもあります。彼は失語症の問題などに取り組みましたが、彼の認知リハビリテーションの考えは今日でも参考にされています。特に、彼はベルンシュタイン、アノーキンの理論を継承しながら「機能的再編成」の考えを発展させました。さらに、ヴィゴツキーとルリヤはともに日常の生活

のなかで生きている人間の具体的な姿をとらえることに意を注ぎました。理論と実践を架橋していくことを心懸けながら研究をしました。ともあれ、この第1部前半のテキストの内容は、けっしてリハビリテーションの現場に直結するものばかりではなく、あくまでも心理学の立場から書かれたものです。ですからこのテキストを素材にして、第1部の締めくくりとして心理学者とリハビリテーション臨床家による対話を収録しました。

では、まずは対話というものの性質を理解するための理論を、正しく理解することから始めましょう。

1 一つの驚き、「ファントム」が消えた

「ファントム」とは日本語では「幽霊・お化け・幻・幻影」といった意味です。ですから、「ファントム」が消えても一向におかしくはないのです。でも、ここで使っている「ファントム」はもう少し限定した意味のもので、医学用語の「幻影肢 (phantom limb)」のことです。医学、リハビリテーションの世界では誰もが知っているものです。切断された肢体がかつてあった身体の一部として実在しているかのように思ってしまう実感的な幻覚です。それは時には痛みや痒みを伴うことも多いと言われています。ここで問題にしたいのは、この「ファントム」「幻影肢」をめぐる研究が何度も消えては現れることをくり返してきたことです。

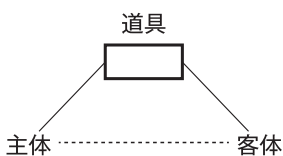
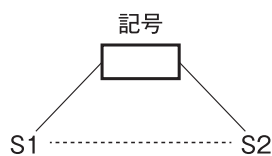
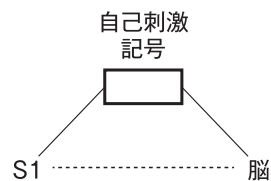
「対話の理論」を読む

本田慎一郎 佐藤先生のテキストを読んで私が一番興味を持ちましたのは、やはり自分の仕事がりハビリテーション治療ということがありますから、ヴィゴツキーが学習というものをどう考えていたか、特に「最近接領域」をどのようなことと考えていたのかということですね。私の場合、認知神経リハビリテーションというものに出会うことがなければ、ヴィゴツキーや彼の考えたことの説明によく使われる「ヴィゴツキーの三角形」のことを知ることはなかったと思います。ただ私は作業療法をやっていることから、患者さんがいて、セラピストがいて、そして両者の前にいろいろな治療道具やアクティビティの素材が置かれているという治療の設定条件には馴染みがありましたから、ヴィゴツキーの三角形のことを知った時、何かまったく新しいものに出会った気はしなかったのです。

佐藤公治 ああ、なるほど。テキストでとりあげたのはこの図ですね。

本田 そうです。ただ、そうは言っても私に馴染みがあったのは、この3つ並んで描かれている三角形の左端だけで、ここから始めてヴィゴツキーが学習というもののプロセスをまんなか、そして右の三角形へと考えていった、その理論については頭のなかにはなかったのです。先生の書かれていることばで言えば「内化」ということです。その内化のプロセスを先生は「即自↓対他↓対自」というようにも説明されています。

佐藤 はい。なぜヴィゴツキーがこんなことを言ったのかと考えると、彼には「道具」、この左の三角形の頂点にあるものですが、この道具には2つのものがあるのじゃないか、それは「技術的道具」と「心理的道具」ではないかと、まず彼の学習理論の出発点にはこの道具の持っている性質のなかでも特に後者の「心理的道具」、つまり人が何かを学習する際に最初に向き合う対象として現れてくる道具の持っている人間の心理に及ぼす性質のことに注目したわけです。こういう性質があるから、結局のところ人間というものは道具に支えられながら行為するしかないのではないかと、というところから考え始めたわけです。これはマルクスの唱えた「対象行為論」という考え方をベースにしているのですが、それについてここで詳しく説明するのは控えるとして、この話のポイントは、人間というのは何か元からそこにあったものから便利なものを道具として選ぶのではなく、それを使って自分の活動を支えるための手段を考えてそれを

図式
I図式
II図式
III

道具として作りだす、加工するための対象として道具というものの性質を理解した、そうしたヴィゴツキーの着想にはマルクスの考え方が大いに利用されているということです。ここまでの話はこのようなこととでいいと思うんです。行為は人間の外側にある道具に媒介されて成り立つ、だから道具は人間の行為の実現を媒介しているのだと、それがポイントです。

本田 はい。だからその、「媒介」という関係のありかたを使って道具は人間の行為の実現に利用されているということですか。

佐藤 そう。で、そこでどのようなことが起こっているのかという説明として「内化」ということが出てきます。

本田 はい。

佐藤 ヴィゴツキーは発達心理学者ですから、発達と学習との関係を第一に考えたのです。これらは切り離せないんだと考えたのです。学習したことをどういうふうに分けるものにしていくかというプロセスが発達だろうと。発達を学習によって生成されていくものの過程として考えたのです。この三角形の図で見るように、私たちは道具に向き合っている、このように発達していく人間は一個の主体として道具に向き合い、それを自分の行為の実現に利用している、主体的に利用している、このように発達は主体的な生成のプロセスなんだと、これがヴィゴツキーの発達心理学者としての真骨頂だと思います。残念なことに、一部の心理学には、人間の発達のためには外の世界に良い資源があればいい、資源をたくさん増やせばいいんだ、良いものに囲まれば人間は良くなるんだというような考え方があります。私はそうした考え方のすべてが間違っているとは思いませんが、自分の活動のために、やりたいことのために何が必要なかという主体の側の要素がその人間の発達していく大きな部分だということは常に大事だと思います。行為は主体の側の問題です。「内化」というのは「自分のものにする」という意味です。

本田 分かります。

佐藤 さらに言えば、「自分のものにする」は「自分をそれによって生成していく」、つまりは「自分というものは学習による内化によって生成されていく」というように彼は考えたのです。発達プロセスをこのように考えた時に出てきたのがこの三角形の図です。ただしこれはとても理念的なモデルです。実際には、たとえば教育の現場とかりハビリテーションの現場でこうした理念をどう使っていくかということが大事になってきます。まさに本田さんがそれをされていると思うんです。本田さんの『豚足に憑依された

ことばをさがす

菊谷浩至 まずはじめに言いたいことは、「詩はおそらくことばでは捕まえられる」ということ。

本田慎一郎 えっ……いきなりな気がするのですが、詩はことばでできていますね？

菊谷 そうですね。ただ、この「詩はことばでは捕まられない」あるいは「詩は文字どおりのことばじゃない」ということを前提にすると、これからの話の筋道が見えやすいのではないかな。

本田 「詩はことばではない」というのは、単純なことではなさそうですね……もうちょっと説明が必要だと思うのですが、それはまずは「詩とはなにか？」っていう前提の話ですね。

菊谷 そう。詩とはなにかって話は「詩論」ってことだけど、この世界にはたくさん詩人がいて、いろいろな詩が書かれていて、詩とはなにかということについてもいろいろな考え方、つまり詩論がある。ですからこれはあくまでも僕の詩論だということはわかっておいてほしい。

本田 それはそうですね。

菊谷 僕は詩をつくるためにはことばを使うけれども、ことばでは書けない、描けないところに行きたい。詩によって到達したいところはことばが必要ではないところです。ことばがなくても存在できているところ、人間の「原質」と言ったら一番近いかな。僕にはある意味、ことばで組み立てられた意味というのは、そうした人間の経験全体の一部にしか触れることのできない不自由な世界だと思う。でもそんなふうにことばで保証、限定された意味に支えられない世界というのも、逆にどこか果てしない奈落のような怖い世界だとも思う。

本田 人間の原質って、平たく言うとなんかの本来の性質ってことですね。それはなんとも僕には想像できない話だから、もう少し続けてください……

菊谷 僕の場合、詩をつくるということは、奈落を心の一方で意識しつつ一方でそれと格闘する危うい快樂のようなものもある。で、そんなことをやっている目的ということできき言った人間の「原質」の世界、ことばは無いけれど、広々とした、制限のない世界に到達したいということ。でもこれは詩をつくることによって到達したい僕の究極の目的なのであって、実際の詩作というのはそこをめぐすためのプロセスです。で、本田さんの著書『豚足に憑依された腕』には患者さんが語られたことばがたくさん書かれてあるでしょ。それを読んでいて、患者さんが本田さんに自分の経験していることをなんとかことば

を使って伝えようとしている様子が、まさしく僕が詩をつくろうとしている時にやっていることと同じだ
と思った。

本田 つまり確認のために、くり返しますが、患者さんがセラピストである僕に、自分の経験世界をなん
とか伝えようとして、自分のなかからことばを見つけようとしている過程と浩至さんが浩至さん自身のな
かからことばを見つけて詩をつくろうとしている過程が同じということですね？ 言い換えると患者さん
の記述が浩至さんには詩に見えるということ？

菊谷 そのものだと思う。それにはもう少し説明がいるだろうけど。詩作の究極の到達点が遠くにあるう
とも、それをめざしているプロセスというのは、目に見えるものと目に見えないものとの隙間をつなげる
ためのことばを探すというふうにも言えますね。

本田 隙間？ つなげる？ もう少しわかりやすく説明してくれますか？

菊谷 隙間をつなげる。それにふさわしいことばを探し出してその隙間をつなぐ足場をつくっていくこ
と。うまく次のことばの足場を置ければその先にあるであろう目的地に少し近づける、それをくり返しま
がら手探りで進んでいくという感覚かな。それが本田さんの本に出てくる患者さんたちがやるうとしてい
ることと同じだと僕は思っただけです。

本田 ということはですよ、先日、佐藤先生とヴィゴツキーのやった仕事のことを話していて、ヴィゴツ
キーが概念化した発達の3つの段階を「即自↓対他↓対自」という学習プロセスという観点からとらえる
という視点（103ページ参照）は、リハビリテーションの治療構造と非常に似ているという結論に至っ
たんです。治療は、患者さんの機能回復のためには、どのようなプロセスをたどるべきかと考える。そし
て、具体的な1つの訓練は、どのような学習プロセスをたどるべきかを考える思考方法ととてもよ
く似ているということなんです。つまりはヴィゴツキーの唱えた発達の3つの段階は、リハビリテーショ
ン治療においても、その訓練の段階づけとして活用できるだろう、という話になったんです。その時、僕
にとっても印象深かったのは、ある1つの訓練によって患者さんの意識経験が変化していくプロセス
は、ヴィゴツキーの学習の3段階という観点からその学習進度を判断できるのではないかということだ
です。であるならば、患者さんが自分に起こっていることをセラピストという他者からの問いかけによっ
てはじめて記述していくことができる。つまり対話関係によって意識化されていくということです。このプ
ロセスもまた詩作のプロセスと同じであると言えるならば、詩作もまたなにかしらの学習のプロセスであ